

昭和四年五月一日発行
第百一十三号

京鹿子

5月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その八十



文束の拾銭切手水仙忌
鳥帰る柱時計の里時間
残更の湖いちまいや鳥帰る
朱の橋の反りのときめき春の雪
春雪を抱く手鏡おちよぼ口
ひとひらの心の関に花吹雪く

愛と死の綻びを継ぐ花の黙
花冷えの時の欠片を抱いてやる
花篝二つの闇の引き合へり
夕去りの氷雨に宿る花の鬱

吟行・醍醐寺界限

浄地へと花の芽組みの上醍醐
ひとひらは小町の許へはねず梅
低きゆゑはねずの梅の人見知り
花に酔ふ桜の馬場の人に酔ふ

近詠

和田 照海

春の虹

春はあけぼの蹠より入る手術室
衣更着の雪の白妙麻醉効く
啓蟄や麻醉覚めたる北病棟
回診のやまことばや春の虹
病棟に靈安室や春障子



近詠

松本 鷹根

下萌

雪嶺の風に鷗と邪心研ぐ
梅咲けり枝は遠嶺の空を裁る
春の田の記憶うすれの株を踏む
確かさがぼやけて芽木の川映り
下萌に座して孤独を陽にさらす



塩貝 朱千



法螺吹き

寒 昂あ の夜へ戻すノクターン
バレンタイン遠き想ひ出ほど甘し
雪 こんこ兄追ひ切れぬ赤い靴
法螺吹きの上向いて吹く鬼踊
美化すれど憑きくる寒い嘘いくつ

英華採集

大白鳥己が影へと着水す

福山 神原 三千世

白鳥は、冬を越すために日本へ渡来してくるので冬の季語となっている。大白鳥の越冬地は、関東以北主に北日本でコハクチョウとの違いは、体型・声の甲高さと嘴の黄色の部分の範囲等比較的区別しやすい。掲句は、大白鳥の着水時を詠んでいるが大型の鳥であるが故に翼を広げ畳まれてゆくまでの時間は、嚙かしカメラマン達の絶好の被写体に違いない。白鳥のランディングを影への着水と捉えた描写の妙が光る。

うづくまる獣のかたち脱ぐセーター

福山 政時 英華

夏の季節とは違い冬に着ている服で、下着・セーター・防寒服等の類はごわごわと嵩がはるものばかりである。故に、脱いだばかりの物はその場に暫く放置されたままであることが多い。掲句は、その場面を切り取ったものであるがその状態をかなりリアルに細かく写生されている。それは、正に不可思議な獣のかたちそのものである。何に見えるかは人それぞれの判断になるが、読み手に十分な余白を残していると言える。

ふきのたうスマホで盗み持ち帰る

津山 溝口 公江

スマホとは個人用の携帯コンピューターの機能を併せ持つ携帯電話のことでスマートフォンを略した言葉のこととして定着している。このスマホは様々な高機能を有するものが高齢者には中々扱いが難しい。作者の公江さんも覚えたての知識を活用し、露の臺をスマホに納めたのであろう。春を感じた喜びを周りの者に伝えたい心がスマホを媒体させて俳味ある一句に成さしめた。これからも色々な物に興味を持ってチャレンジ精神を持ち続けてもらいたい。

夏安居 沼田巴字

天国へ行く道なれや鉄線花
若楓死想ふときの死に処
桐の花八十年の苦難越え
臨終まで幾許ありや月朧
夏安居や導き給ふ維摩経

秋さくら 北川孝子

更くる夜のひとり熟考名残月
三歳児のはや自称あり夜のみかん
秋さくらひと日を淡く過ごしけり
夜のみかん吾子の幼なをしのびつつ
老ひてなほ新種の蜜柑選びけり

春の雪 植村蘇星

かるやかなシュレッターの音二月尽
韻文か散文か春の雪深し
激とばす文武両道春の雪
此にしも青山の有り残る雪
蛇の目と合ひししばしの孤独感

時雨 直江裕子

マスクして見事あやつに謀られる
救いがたいおでんの玉子老いもする
苗木市やさしい時間買ってくる
粥すこし流水きそうな味がする
セーターをすんなり抜ける世迷い首

明日まで 高木晶子

降る雪と米の磨ぎ汁百歳小町
明日まで毀さぬやうに寒卵
牡蠣の冷胃にしみわたる親不孝
桜幹ねぢれ戻さず震災忌
ポケットに残る半巻春いまだ

蜃気楼 奥田筆子

ワケチンの跡痒くなり梅日和
いくさあり蜃気楼に血のにじむ
一と間占め貰い手のなき雛飾り
魚沼の米袋より花吹雪
傷跡を雪が均してきらめけり

春雪 伊藤希眸

白梅や孤独の庭は銀世界
帯結ぶ指の硬さよ春の雪
本棚の隅にサルトル春の蠅
春雪に犬の足跡車音過ぐ
豆まきや節の翁は姿見鏡に

五月のひかり 井上菜摘子

みづいろのをりづる翔ちし夏はじめ
駆けし児が五月のひかりとなり戻る
初夏の一樹ゆすれば空にほふ
はつなつの端を濡らしてゐるタオル
おうちカフェゆふやけの彩さしてきし

神麓集

母の日 村田あを衣

母の日の母の日記にゐる私
自由といふ不自由風船放ちたる
あやとりの結び目解きぬ蝶の屋
白木蓮空まつさらにしてしまふ
薔薇百本抽いても淋し昼の月

年明くる 山中志津子

三山は神の飛び石初霞
元朝や神将の覇氣堂に満つ
飽食も餓も日常年明くる
シテは雪ワキは風とも懸け舞台
凍蝶の生るまぼろしの氷河より

卯波 井尻妙子

動物の一種の人としてうらら
よく笑ふ人のうしろで越す卯波
てのひらの錠剤の数春遅々と
白梅に凭る未だに父母を手離せず
料峭や零れ落ちさうなピアス

北窓開く 鷺山珀眉

ここは終点初東風にのりかへる
春よ来よ爪先立ちの好奇心
神具屋の間口一間日脚伸ぶ
ものの芽や付箋の増ゆる料理本
空谷の聲音北窓を開く

冬木の芽 亀井福恵

大いなる伸び代を秘め冬木の芽
現世の決済未だ冬すみれ
ものの芽のなべてくれなゐなべて黙
一枚の落葉を膝に釈迦在す
箒目にすぐに足跡春隣

風の翅音^は 菊池和子

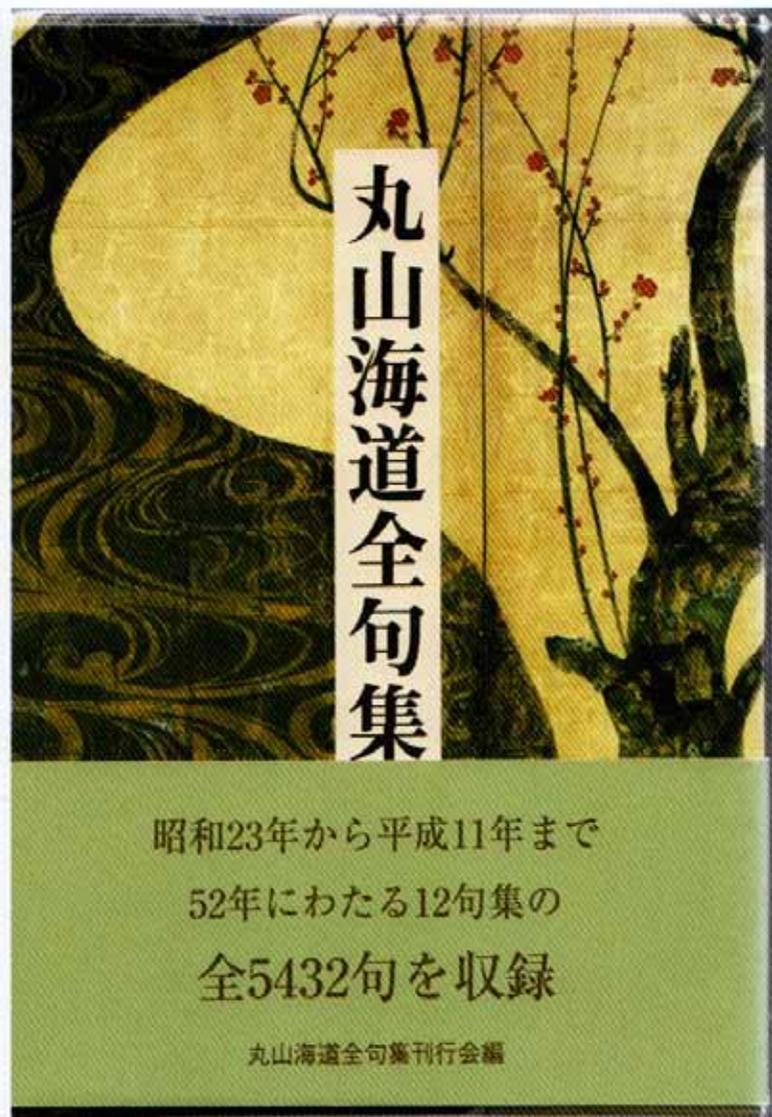
朱の門に映ゆる深雪や風草書
世の中のどう変ろうと狸汁
空真澄冬木千手の力瘤
姉ちやんと呼ばれ露天の春を買ふ
影みせぬ風の翅音や春の水

もろ雀 西村白杼

猫柳ひよいと貌出すもろ雀
空もまた昨日のつづき芽吹き音
受験子の絵馬ことごと揺れ通し
風尾ひれつけてそこまで春が来た
まんさくの黄色の吐息太けむり

土の春 安田優歌

村っ子の詔ひ知らず露の臺
膝ついて草抜いてゐる土の春
如月の光おもたき星ふる夜
絶望の刹那のかをり蝶凍つる
みどり児の春光つかむ丸^まき眸よ



「丸山海道全句集」

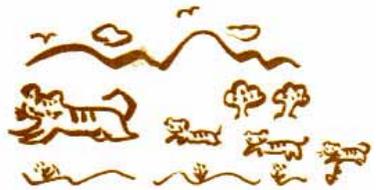
パノラマ 本郷 公子

日脚伸ぶ神具の店の長寿箸
風花や亡き幼子のたよりはも
大寒の一步確かむ稲荷山
龍の玉斜にはづみて見失ふ
寒明けやパノラマで見る日本地図

揚雲雀 石原 孝人

蒼天へ乗る風読みて揚雲雀
一湾に真帆の水脈引く初荷船
陽に染まる冬の海霧船の影
手応へに空傾けて蜆舟
堰越ゆる軽き水音猫柳





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

無骨なる愛のかたちや冬の梨
ジバルデイ蓄ふつくら室の花
春浅し砥石濡らして刃研ぐ
刀身を流るるひかり冴返る
風花や腕くみなほす並木道

岡山 佐藤 千恵

大白鳥己が影へと着水す
寒の入りコンクリートの打ち放し
家を吹き寄せるかに吹雪く夜
夕日差す住まぬ畳の冷たかり
連凧や龍に背骨のある如く
うづくまる獣のかたち脱ぐセーター

福山 神原三千世

政時 英華

初鳩の扇開きや一の宮
恩愛に生きて今あり屠蘇を酌む
冬日向へくぼがほどの潦
頬被り浜の漢の国訛

ふきのたうスマホで盗み持ち帰る

津山 溝口 公江

梅原ひろし

如月のまばたく空に二羽の鳶
名園の一步に清し雪解水
春の雨かん忍袋を繕ひぬ
独りには鬼は内なり節分会

末無川雪解の水の流れゆく

了子 伊吹之博

春の宵思ひもかけぬ友の婚
東風吹いて帰国の準備二年分
寒明や先づしたいこと二つ三つ
花の雨片袖濡らす一人傘

戸田 遠山 悟史

身を締め次の跳躍春を待つ
宝くじ好きな数字を立春大吉
散策や歩みの止まる梅一分
薄水や音なき音の融ける声
思ひ切り今を生きよと椿満つ

習志野 上野 紫泉

先考の湯婆ぬくし二十年
氷見の声寒鰯の糶盛り上がる
コロナ禍や嚏の一発車内の目
学友の安否を尋ね春の道
鬼やらひ子らの雄叫び福を呼ぶ
北窓を開ける児の顔母の声
春隣動きだしたるつがひ鳥
立春大吉北北西へ歩き出せ
干蒲団まとふやすらぎ陽の匂ひ
うかうかと自適十年寒明ける
粉雪や朝日の紅の舞ひ降りぬ
自然薯の三年ものに鍬そろり
松に添ふ枝振りの良き実南天
焙煎の香りゆるりと朝の雪
全世の無病息災初明り
ストールに埋もれし顔や陽の座席
待春や袋の中で鳴る土鈴
寒水に指とられつつ銭洗ふ
湯豆腐のぐらりと動き孤独にす
ひらめきを待つやあらあら寒明ける

市川 小島 正士

松戸 岡山 敦子